苗族刺繍の母娘伝承を再考する
―― 中国貴州省黔東南苗族侗族自治州西江鎮を事例として ――

Re Examination of the Matrilineal Inheritance of the Miao Embroidery
―― A Case Study of Xijiang, Qiandongnan Miao and Dong Autonomous Prefecture, Guizhou, China ――

楊　　梅　竹*

YANG Meizhu

（要旨）

本論文は、中国貴州省黔東南苗族侗族自治州、雷山県西江鎮西江千戸苗寨の刺繍を研究対象とし、苗族の刺繍伝承のあり方を再考するものである。これまでの研究において苗族の刺繍伝承方法は、主に母から娘への伝承、すなわち母娘伝承を中心とするものがほとんどであった。だが本論ではフィールド調査に基づき、同時代の女性による影響が少なくなく、刺繍技法という観点に立てば、むしろ母娘伝承は同時代の女性による伝承方式の1部分に過ぎないことを指摘する。すなわち、それはかつての刺繍の「母娘伝承」を改めて「同時代の女性」という観点から再考することを意味している。

本論内では複数の事例を以下のように整理し議論を進める。調査地における3人の女性、楊A、李C、宋Aの親族関係図をとおして、西江の母娘伝承を実証的に明らかにした後、楊Aと宋Aのライフステージを娘→結婚（坐家を含む）→母という3つの段階に分ける。その上で刺繍の伝承において、母、母系親族、あるいは夫方の親族、姉妹、女性の友人、同じ村の女性など、いずれも同時代に生活している女性から刺繍が伝承されている状況を技法の伝承という視点から示す。刺繍の伝承において、母、娘、オバ、親戚の女性、女性の友人はどれも1人の女性として、同時代に暮らしている女性の中の一員に他ならない。すなわち、母から娘へと刺繍技法が伝わるということは同時代の女性による伝承と考えられ、これまで一般的であった「母娘伝承」を承認したうえで、「母娘伝承」を「同時代伝承」の1部分であると改めて位置づけることで、苗族刺繍の伝承のあり方を再考する。

キーワード：苗族　刺繍　母娘伝承　同時代伝承

はじめに

苗族は長い歴史を経るなかで無文字文化を形成し、自民族の歴史を服装の刺繍を通して伝えてきたとされている[1]。苗族にとって刺繍とは重要な民族文化の象徴であり、民族アイデンティティにとっても重要な要素となっている。民族衣装についている刺繍は外部の者にとっては苗族という民族を識別するための印である一方、苗族自身にとっても各地域の苗族グループを区別する基準の1つとなっている。

本論で調査地とする西江は「悠久の歴史」[2]を有し、苗族の伝統的な文化を継承している地域として知られている。中国西南部の貴州省黔東南地域ではとりわけ数多くの苗族が居

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程１年（The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University）

住し、苗族の「奥地」とも称されてきた。同地域に居住している苗族の人口は中国全土の苗族人口の６分の１[3]を占めており、また多くの研究において、黔東南地域の苗族は「黒苗」支系に属していると指摘される[4]。20世紀初頭、鳥居龍蔵[5]は、貴州省の苗族を「紅苗」、「白苗」、「黒苗」、「花苗」などの82の支系に分類したが、1951年、「これらの表記は明確に侮辱的性質を持つ少数民族の名称である」として国務院（当時は「政務院」）により使用禁止令が出された[6]。しかし中華人民共和国成立後、出版された地方誌や論文などにおいて、苗族は依然としていくつかの「支系」に分類されている。

貴州苗族の刺繍を研究する際、黔東南雷山県地域の苗族の刺繍は研究蓄積が豊富な黒苗支系の代表的な地域である。本論は、中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県西江鎮西江千戸苗寨の刺繍を研究対象とし、フィールド調査に基づいて刺繍、とりわけ刺繍技法の伝承方法を再考する。以下、1章にて調査地を概観した後、母娘の刺繍伝承において特に重要な期間とされる「坐家」について説明する。続く2章では、これまで先行研究にて定式化されてきた、母から娘へ刺繍が伝承される、いわゆる母娘伝承の研究事例を提示し、3章にて実地調査に基づいて刺繍技法の伝承を確認する。そして4章にて先行研究において定式化されてきた母娘伝承を検証する。本論が特に力点を置くのは、母以外の同時代の女性による伝承の重要性、とりわけ様々な刺繍技法の伝承方法を再確認することであり、母娘伝承は同時代の女性による伝承方式の1部分に過ぎないということを指摘することである。つまり、本論の目的は従来の母娘伝承を主体とした苗族刺繍の継承方法を改めて「同時代の女性」という観点から問い直すことである。

１．調査地の概要

1.1　西江の地理的位置

黔東南州は凱里市及び麻江、雷山、丹寨、黄平、施秉、鎮遠、三穂、岑巩、天柱、錦屏、黎平、従江、榕江、台江、剣河などの15の県[7]からなっている。本論の調査地である雷山県は貴州省の東南部に位置し、西江鎮西江千戸苗寨（西江村）は雷山県の東北部に位置する[8]。西江村の人口規模は1,432戸、5,515人である[9]。西江の苗族の先祖は「Dlid」氏族に属し、西江のあたりは田圃が多い（苗語の「jangl」は田圃という意味」）ため、周辺の苗族から「Dlib jangl」と呼ばれるようになる。清の時代、1738年の「改土帰流」[10]により、「Dlib jangl」は漢民族へ同化[11]され、音訳で「Dlib jangl」に「鶏講」という漢字があてられるようになった。当地は農業が主産業で、稲、野菜などを作っていたが、近年は観光地として有名になり、観光産業に従事する者も少なくない。2015年12月24日、全長21.9キロの凱雷高速が開通し、交通の便も各段に改善されることとなった。

1.2　坐家について

苗族女性は結婚に前後して母親から娘へ刺繍が教えられる特別な期間がある。苗族の女性は結婚後、実家に居住し、結婚後の家族の衣裳の準備する期間を設ける。この期間は「坐家」と呼ばれる。坐家は、鈴木正崇・金丸良子によれば「結婚後も花嫁が引き続き実家に住み、これを『坐家』（通い婚：niangbzaid nai）と称する。この後しばらくは吃新節、苗年という祭りの時だけ、夫の家に滞在するという生活を続ける。（中略）結婚後1～2年の間は、夫と妻は分かれて住む。（中略）この間は、もし普段の時に、花嫁が夫の家に来ても、男性は出かけてしまって、『回避』（Vak

mais）をする。普通は妻が身籠ってから、夫が妻を呼びよせるのであり、それまでは同居に備えて衣服をつくったりなど準備する期間である。漢語で『不落夫家』で、日本でいう妻訪いに当たる形式だが、労働力の問題が大きく絡んでいる」[12]。これまでの研究では坐家は刺繍技術の習得期間とされ、また婚姻の猶予期間であると指摘してきた。しかし西江では1960年代頃には坐家をする女性は既に少なくなっていたという。すなわち半世紀近くにわたって、刺繍の伝承は、単純に「坐家を通して行われる」とは言えない状況にあったことが言えよう。ただそれは以下に述べる政治経済的な状況と無関係ではない。

1.3　西江苗族刺繍伝承に関する時代背景（1960年代から現在まで）

基本的に「坐家」の期間に苗族女性は刺繍を習得したが、20世紀後半以降、中国は政治的に不安定な時期に在り、彼らのライフスタイルも大きな変化を余儀なくされた。そのため伝承のあり方も政治状況と無関係ではない。そのため伝承の現状を考える上でも、半世紀前から現在における彼らをとりまく環境も概観しておきたい。

筆者は2016年の2月、7月、9月の3回、合わせて40日間、中国貴州省黔東南苗族侗族自治州西江鎮でフィールド調査を行った。被調査者の中の、李A（1939年生、男性）と宋A（1964年生、女性）の夫婦のライフヒストリーをベースとして1960年代から2016年の調査当時の時代背景にまとめ、西江刺繍伝承に関する基本的な時代背景としておきたい。

李Aのライフヒストリーをもとに、筆者は李Aの生活状況を5つの時期に分けた。

①1939年～1958年：家の状況は貧しかったが、学校に行き、国からの補助金があり、食べることにそれ程心配はしていなかった。

②1958年～1978年：飢饉や人民公社制度のため、西江の人々は貧しい生活をおくり、「腹一杯」に食べられない時期であった。いくら労働しても、労働成果を国家に捧げなければならないため、生活は良くならなかったという。李Aの話によれば、李Aの姉である李H（生年不詳）も労働に参加し、刺繍する時間を持つことは難しかった。

③1978年～1984年：改革開放が始まり、貧しかったが労働により生活改善がみられるようになった。70～80年代、1人っ子政策や寄宿を伴う学校教育のため、村落内の子供が減少し、刺繍の習得者、刺繍習得の機会も減少した。

④1984年～2008年：中国沿海の都市の経済発展が著しく、西江の若者の出稼ぎ者が激増していった。市場経済化のなかで刺繍という手工芸を通して生計を維持することが難しく、必然的に若者は出稼ぎせざるをえない状況に置かれたため、若い世代の刺繍継承者が減少した。

⑤2008年～現在：西江鎮が観光地になり、出稼ぎに出る若者は減少した。現地の人の生活も豊かになりつつある。刺繍作品の経済的価値を見出し、刺繍販売店を出している人もいるが、現地の人はホテルやレストランの仕事をしたほうが手早く現金収入を得られるため、刺繍をする人は多いとは言えない。

もちろん李A1人だけのライフヒストリーをもって西江鎮の住民の代表とすることはできないが、李Aが生まれてから1958年に学業を終える期間を除いて、西江の1960年代から現在までの大まかな生活状況をうかがい知ることができるといえよう。20世紀後半以降は、いわゆる「伝統的」な伝承方法というような単純な語りでは説明できない状況が彼らをとりまいていた。

1960～1980年代は、飢饉、文化大革命とい

う時代背景の中で西江の住民は生活に窮した時代が続いたため、刺繍という工芸品を作る時間的、経済的余裕のない状況であった。改革開放後、生活にゆとりが生じ、刺繍をする余裕が生まれたものの、経済的な豊かさをもとめて出稼ぎに行く者も増えたり、学校教育のため子どもが親から離れたり、現地の観光開発の影響で生業に変化があったりしたため、母から娘へという刺繍の伝承は次第に行われなくなってきている。しかし現在、観光化や経済発展に伴い、新たに刺繍教室という伝承方式も現れ始めている。以上が調査地の刺繍伝承をとりまく概略と現状である。

2. 苗族の刺繍伝承に関する研究の現状

苗族刺繍に関する研究の蓄積は少なくなく、主に中国の研究者によるものが多い。それらは苗族刺繍の商品化、伝承と保護、芸術性、図案、歴史、技法、民俗のなどの分野に分けることができる。本研究はとりわけ苗族の刺繍の伝承に着目し、以下のように研究史を整理したうえで、問題点を整理することにしたい。

苗族の刺繍研究において数多くの論考を発表してきた龍葉先[13]は、苗族の刺繍の伝承には「母娘相伝」(「輪型模式」)と「仲間相伝」(「全通模式」) という2つのパターンがあることを指摘している。輪型模式は「母娘相伝」であり、家庭内で母（上位）の世代より娘（下位）の世代に伝わり、娘が母になるとまた次の世代に伝えることを意味する。

「全通模式」は「仲間相伝」であり、地区内の同世代の女性が互いの交流の中で刺繍を学習することである。すなわち、龍葉先は刺繍の伝承を母娘という「縦」方向の伝承と同世代の仲間の「横」方向の伝承とに分けている。龍によれば苗族刺繍は「輪型」→「全通」→「輪型」という流れで伝わるという。また龍は「苗族少女の〈自然〉から〈社会〉への転換というのは、母から娘へ伝承されるのが一番主要な方法であり、その転換は主に家庭内と地域社会内で実現する。娘は母から刺繍を学ぶだけでなく、兄の嫁や年齢の近い女性の仲間からも学んでいる。この娘たちは刺繍をしながらお喋りを続け、刺繍の経験を共有することで、気持ちをより合わせ、一緒に新しい紋様を作り出したりもする。その娘が母になった時、自分の技術を自分の娘に教える。このようなことが繰り返される」[14]としている。

龍の「母娘相伝」は母娘という上位世代から下位世代へという縦軸を作り、「仲間相伝」は同世代の横軸を作っているとの指摘は苗族刺繍の伝承に関する研究の中で極めて重要である。しかし、龍は母系以外の血縁関係などのない上位世代と下位世代との伝承を見落としている。龍が「母から娘へと伝承するのは一番主要な方式である」と言っていることから、母系以外の伝承にも注意を向けつつも、やはり龍の議論は「母娘伝承」に偏重していると言わざるを得ない。また龍の苗族刺繍の「輪型」（母娘）→「全通」（同世代友人）→「輪型」（母娘）という順で刺繍を伝承しているという指摘それ自体について、筆者は強く否定するつもりはないが、刺繍技法の伝承という視点からみれば、そのフローは伝承を固定化してしまっているともいえ、刺繍技法のダイナミズムを描き切れていないといえる。

次に刺繍を母娘の情動的つながりから研究した佐藤若菜[15]について触れたい。佐藤はミャオ族[16]の刺繍伝承というよりも民族衣装それ自体に注目しているが、彼女の提示している「民族衣装」は刺繍と深く関わっている。佐藤は中国西南部（貴州省・雲南省・湖南省）

に暮らすミャオ族を事例に、現地の社会経済史を背景とした衣装の価値の変遷、製作と所有の変化、および女性のライフコースの変容の中で、刺繍文化を捉えなおす試みを通じ、ミャオ族における衣装を介した母娘の「共感的」関係が生起する過程を示した。1980年頃まで、ミャオ族の女性のライフコースには、坐家と呼ばれる婚礼から婚家に移住するまでの猶予期間があった。しかし1990年頃から坐家はなくなり、新婦は婚礼の数日後に夫と暮らしはじめ、早々と子をもうけるようになった。これに伴い、衣装製作においても変化が起きていると佐藤は指摘する。

娘は自身の帰属が実家から婚家へ急に変わることを緩和するため、婚出してもなお母親への配慮を示す為に、衣装を実家に預けていた。1980年代以前には製作技術の伝習など、母娘間の特有の関係が衣装を介して築かれていたという。しかし、1990年以降、衣装を略奪したり、製作した上で保管したり、預けたりする行為が、衣装のやりとりだけにとどまらない多様な意味合いを持つようになった。1990年代以降、衣装の価値が上昇し、嫁不足や坐家期間の短縮にみられる婚姻形態の変化、そして衣装が母の手で娘のために作られるようになった事によって、衣装をめぐる母娘の「共感的」関係が生起するようになったという。佐藤の論文には民族衣装の製作における「母娘関係」が強く主張されている。確かに衣装の製作には「母娘関係」が重要であるが、技法の伝承という視点から人間関係を考えるのであれば、やはり同時代の女性の存在を見落としてはならない。また佐藤は苗族の女性が結婚後に「坐家」という生家に住み続ける期間を利用し、母から刺繍を習得することを指摘し、加えて刺繍が施された衣装が母系的に管理されることに注目している。確かに衣装の管理は母系的であるが、そこに施された刺繍の技法が、必ずしも母系あるいは母娘間でのみ継承されてきたものとは限らない。

以上、代表的な研究者として龍と佐藤を挙げたが、先行研究、とりわけ中国国内の苗族の刺繍の伝承に関する他の先行研究を挙げれば枚挙に暇がない。例えば黄玉氷[17]、呉平[18]、劉孝蓉[19]などの研究を挙げることが出来るが、それらは苗族刺繍の伝承について「母から娘へ」という「母娘伝承」が行われているという表現にとどまっており、それが実際に、どのように母から娘へと伝承されているかという点に関して十分に示しているとはいえない。

以上を踏まえたうえで、本論は実証的な調査データから「母娘伝承」の実体を明らかにし、「母娘関係」の重要性を認めつつも、母系に偏重し過ぎてきた先行研究を批判的に検討することを試みる。そして刺繍伝承、とりわけ刺繍技法の伝承において、母、夫方の親族、姉妹、女性の友人、同じ地域の女性など、「同時代の女性による伝承」という視座が重要であることを指摘する。筆者はこれらのアクターをいずれも「同時代の女性」の中の1人と考え、「母娘伝承」を「同時代の女性による伝承」の一部に再配置する。

3．西江の苗族刺繍の伝承

3.1　刺繍の種類

苗族は無文字社会であり、刺繍は彼らの語りを表す特別な符号である。苗族の刺繍は長い歴史を有する手工芸であり、苗族衣装の装飾の主要な手段となっている。それは苗族の女性文化の代表的なものでもあり、様々な図案、刺繍スタイルを生み出してきた。苗繍[20]の刺し方は緻密であり、デザインの題材も豊富で、主に鳥、魚、銅鼓、蝶、龍などがあり、

苗族の「歴史」を表す紋様も多く存在する。

苗繡の技法は数多くあり、苗族の刺繡を調査対象とする呉平によれば「苗繡の中には平繡、板丝繡、数紗繡、納錦繡、皺繡、辮繡、破線繡、錫繡、打籽繡、堆繡、馬尾繡、絞繡、盤線繡、織繡、挽繡、貼花繡、挑花、双面繡、直針繡、鎖辺繡、盤金繡など20種類以上ある」[21]という。

筆者は2015年10月、2016年2月、同年9月の西江での実地調査で、12人の女性から聞き取りを行った。本論の事例にて詳しく習得技法を聞き取れた女性は5人であり、習得している刺繡技法の詳細は表１に示した通りである。

表１から、西江でよくみられる刺繡技法は平繡、剖線繡、皺繡、辮繡、馬尾繡、鎖繡（双針繡、単針繡）、数紗繡、噴花繡、貼花繡であることが分かる。現地の人の話に共通しているのは、平繡が一番簡単な刺繡技法であり、ほぼ全員平繡から学び始めるという。平繡は刺繡の入門技法であり、刺繡の基本であると考えてよいであろう。2017年2月、現地調査で聞き取りをした宋Ａは「刺繡を学び始めた時、母から一番最初に教えてもらったのは平繡だった。ほとんどみんな平繡から学び始める」と筆者に語った。筆者と張Ａ（1994年生、郎徳上寨出身）が刺繡を学ぼうとしたとき、宋Ａが最初に教えてくれたのも平繡であった。

3.2　刺繡紋様の伝承

苗族は文字を持たない民族であるため、苗族衣装に付けている刺繡の紋様は、時として文字のかわりとして苗族の歴史を表す役割を担ってきた。西江苗族の刺繡は主に女性の盛装の襟、背中、肩、エプロン、スカート、靴などに付けられる。また子どもの帽子、背負い、布団にもよく付けられる。

刺繡の紋様は苗族の女性が刺繡を習得する過程において伝わる。たとえば宋Ａは紋様の伝承について次のように語る。「母が刺繡したものを参考にしたり、自分の好きな花を刺繡にしたりすることが多い。胡蝶ママ[23]が子供を守ってくれるということは昔のお年寄りから聞いた」。宋Ａの語りからも、刺繡をする女性が前世代から伝わってきた刺繡作品を模倣することにより、紋様とそこに込められた意味を継承している様子がうかがえる。

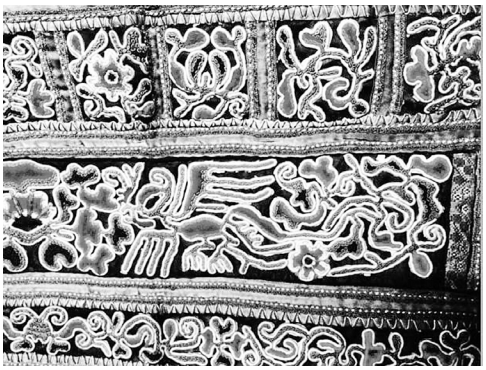

写真１　宋Ａの家にある刺繡作品（筆者撮影）

表１　西江の刺繡と女性の習得技法（筆者作成）

	氏名（生年、出身地）	習得した刺繡技法
1	楊Ａ（1931年生、開覚[22]村）	平繡、鎖繡（双針繡、単針繡）、皺繡、辮繡、馬尾繡、数紗繡、膨花繡、剖線繡
2	李Ｂ（1972年生、開覚村）	平繡、鎖繡（双針繡、単針繡）、皺繡、包繡、貼花繡、辮繡、馬尾繡、数紗繡、噴花繡、剖線繡
3	宋Ａ（1964年生、東引村）	平繡、馬尾繡、皺繡、鎖繡（双針繡）、数紗繡、辮繡、剖線繡
4	毛Ａ（1974年生、南貴村）	平繡、皺繡、辮繡、馬尾繡、鎖繡（双針繡）、剖線繡
5	張Ａ（1994年生、郎徳上寨）	平繡

写真１は宋Ａの刺繍販売店の刺繍作品である。抽象的でわかりにくい紋様であるため、筆者が彼女に紋様について聞くと、「多分鳥だろう。花もあるが。私にもわからない」と話した。紋様は実在する刺繍作品があれば次の世代に伝承することが出来るが、現在では紋様の意味は必ずしも「正確」に下位世代へと伝わっているわけではないようである。

3.3　刺繍技法の伝承

本論では刺繍の伝承を紋様と技法に分け、技法伝承に重点をおいている。以下では、技法の伝承方法を、母娘伝承、同時代伝承、刺繍教室伝承に整理し議論を進めていく。

3.3.1　母娘伝承の事例

苗族の刺繍は一般に、代々母親から娘へと伝承されてきている。先述したようにかつて苗族の女性は結婚すると坐家という期間を経た後、夫の家へ居住していた。坐家の期間中に、結婚後に自分が身に着ける衣類や子供のおぶい紐、靴などを製作する。筆者が現地調査をした12人の女性の内、坐家をした者2名としなかった1名の事例を以下に示す。

坐家をした楊Ａ（1931年生、開覚）は、12歳の時に母を亡くした（図１）。そのため、母に刺繍を習ったのは極めて短い期間であり、完全に刺繍技法を習得することはできなかった。その後、母の妹であるオバから刺繍技法を習った。「母とオバは刺繍を祖母から学んだと聞いたことがあるが、具体的に何歳から学び始めたのか、また刺繍の習得過程については知らない」と楊Ａは語った。楊Ａには弟が1人いたが、刺繍の習得は彼女1人がした。坐家の期間に、13着の服を作り夫の家へ持って行った。結婚後、娘4人と息子1人を授かり、4人の娘に刺繍を教えた。現在は4番目の娘の李Ｂと一緒に生活している。2016年の調査当時は85歳の高齢であったが、健康であるため、娘が経営している「雷山県西江阿幼苗族刺繍紡」で刺繍や服縫製などの仕事をしていた。

楊Ａの事例から、「母親に刺繍を学んだ」「母の死後、母方のオバから刺繍を学んだ」という２つのことが分かる。つまり楊Ａは刺繍を母系親族から習得した。

次に同じく坐家をした李Ｃ（1941年生）の事例である（図２）。李Ｃは結婚して現在東引村に住んでいる。李Ｃは母から刺繍の技術を教えられたと語り、糸紡ぎ、布織りもできる。結婚に際して、2年間ほど坐家をしたという。結婚する前から母に刺繍を教えてもらったが、坐家の期間に刺繍の技術が向上したという。李Ｃ自身もまた2人の娘に刺繍の

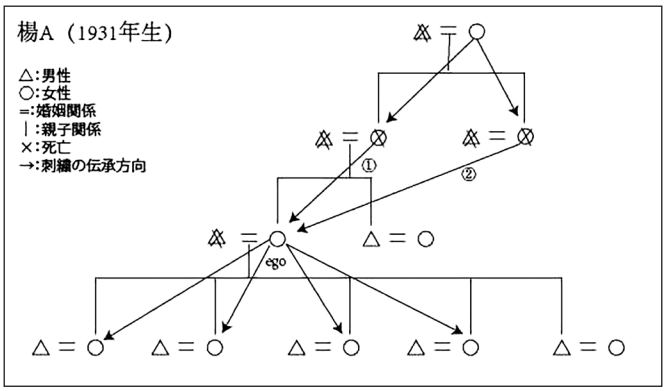

図1　楊Ａ（1931年生）親族関係図（筆者作成）

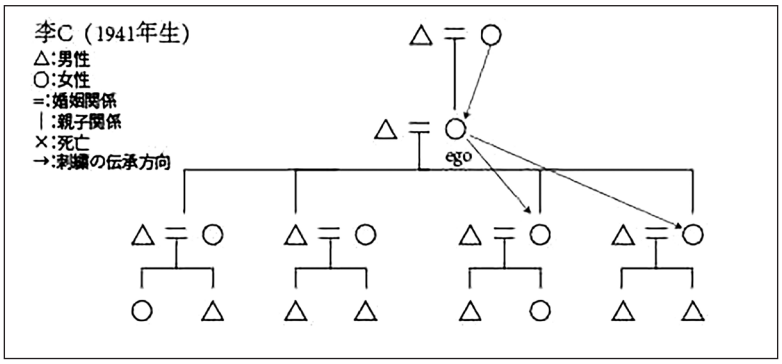

図２　李Ｃ（1941年生）親族関係図（筆者作成）

技法を教えた。長女の宋C(1971年生）は也薅[24]の嫁になり、現在は民宿を経営している。彼女は現在あまり刺繍をしていないようである。次女の宋Ｄ（1973年生）は西江鎮羊排村也東寨[25]に嫁ぎ、現在レストランを経営しているため、刺繍をする時間は少ないという。李Ｃは現在次男の宋Ｅ（1966年生）の嫁である李Ｄ（1968年生）が経営している「李玉芳刺繍工紡」で刺繍関係の仕事を手伝っている。

李Ｃの世代は、刺繍を学ぶとき、糸紡、布織も学んでいたが、娘の世代になると、布や糸が買えるようになり、次第に布と糸は自分で作らないようになった。李Ｃは現在たまに布を織るが、普段はほとんど布と糸を買っている。李Ｃは嫁の経営している刺繍工紡で主に子供の靴に、簡単な刺繍をしている。嫁に積極的に教えているわけではないが、一緒に刺繍をする時に、紋様、技法、色合わせなどについて話し合う。その話し合いと刺繍をすることで、互いに刺繍を学んでいると考えられる。

3人目は坐家しなかった宋Ａ（1964年生）の事例である（図３）。彼女は小学校を卒業した後、15歳の頃に、母から刺繍を学び始めた。しかし糸紡ぎと布織りはできないという。結婚した後の1980年代、5年近く刺繍で生計を立てていたが離婚することとなった。1990年に、宋Ａは李A(1939年生）と結婚した（2人とも再婚)。夫の李Aは既に子どもが5人(男3人、女2人）おり、宋Ａとの間にも男の子を1人もうけたため、合わせて6人の子供がいる。結婚後、李Aの娘は2人とも刺繍に全く興味を示さなかったため、刺繍は教えなかったという。現在、長女の李E(1970年生）は結婚し、

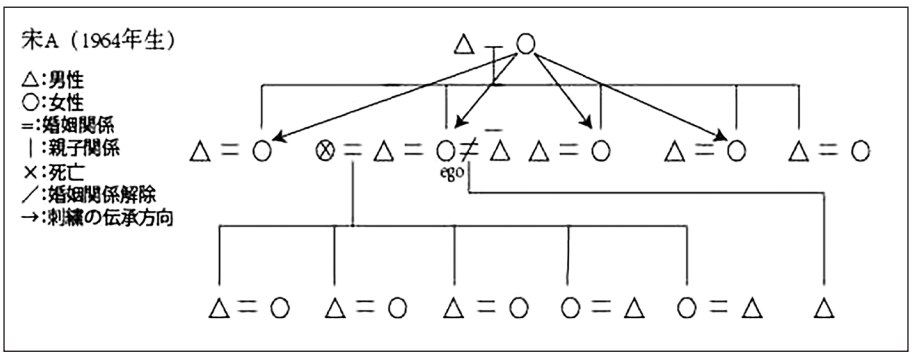

図３　宋Ａ（1964年生）親族関係図（筆者作成）

凱里市[26]に住んでいる。その孫娘も刺繍に興味がなく、学校の勉強もあることから、刺繍を教えなかったと語る。次女の李F（1973年生）は結婚し、江蘇省に住んでいる。その孫娘とは離れて暮らしているため、刺繍は教えようがないと宋Aは話す。

この3人だけではなく、筆者が聞き取り調査した12人の女性の内、楊A（1931年生）、楊B（1935年生）、宋B（1939年生）、李C（1941年生）、宋A（1964年生）、楊C（1968年生）、李D（1968年生）、李G（1970年生）李B（1972年生）、毛A（1974年生）、楊D（1994年生、未婚）の11人も母から刺繍を習っていた。しかし、残りの1人である張A（1994年生）は母から習っていない（後述するが彼女は同時代の女性から刺繍を始めることとなる）。また毛Aは娘がいないので、次の世代に刺繍を教えていない。李Bや宋Aのように娘が刺繍に興味を示さないパターンもある。そして息子に刺繍を教えない。ここまでは、龍や佐藤の指摘の通り「母娘伝承」が存在することは明確である。

3.3.2　同時代の女性による伝承の事例

次に母娘伝承とは異なった形態で刺繍の技術を習得する事例をみていくことにする。フィールド調査において、現地の女性に「刺繍は誰に教えてもらったか」という質問をすると、間違いなくほぼ全員が「母に教えてもらった」と答える。そのため語りのレベルにおいて刺繍が「母娘伝承」されているということは異論を挟む余地はない。しかし実際にすべての刺繍技法が母から娘へと伝承されているかというと、必ずしもそうとは言い切れない（また後述する張Aのように初めから母親以外から習うこともある）。以下の事例より、刺繍、とりわけ刺繍技法が同時代の女性によって伝承されることを示す。

刺繍技法の習得は主に母から、又は同時代の女性から行われる。表1で示したように、李B（1972年生）の母は楊A（1931年生）であるが、李Bができる刺繍技法は母より多く、貼花繍に関しては母から習得したのではなく、一緒に刺繍する女性から学んだという（表１を参照）。「母に刺繍を学んだが、全部母から学んだわけではない。時々友達と一緒に刺繍するので、友達に刺繍技法学んだこともある」と李Bは語る。

また宋A（1964年生）も刺繍技法を母に教えてもらったというが、弟が結婚して遼寧省[27]に移住することになり、母も弟のところへ移住したので、母娘間で伝承ができる状況ではなくなった。2016年の4月に雷山県政府により「刺繍試合」[28]が開催された時、宋Aは刺繍試合に参加する作品に双針繍を使った。双針繍の技法は母からではなく、一緒に刺繍試合に参加する人に教えてもらったという。

一方、宋Aの店でアルバイトしていた張A（1994年生）は母から刺繍を学んでおらず、宋Aから平繍を学んだ。張Aの事例から、刺繍の継承は特に母からでなくても、同時代の刺繍のできる女性から習得することが可能であることが考えられる。すなわち刺繍伝承は母系にのみ伝わる秘伝でもなければ、母系以外へ伝承することが禁止されているわけでもない。佐藤が指摘したように、衣装に関しては母娘間の関係性が強調されるが、そこに施された刺繍の技術、技法の交流に関しては非常にオープンであるといえる。

李Dのように、姑（夫方親族）である李Cと居住しているため、一緒に刺繍する時に、刺繍の技法や文様についての話し合うことにより、無意識に刺繍技法の相互学習が行われているケースもある。

西江で調査をしているとよく目にするのが、2〜3人あるいは4〜5人の女性が家の玄関

写真２　一緒に刺繍する女性たち（筆者撮影2016年2月）

の前で話をしながら、刺繍をしている光景である。写真2のように、10数人の女性が広場に集まり、話しをしながら刺繍をしていることもある。

ここまで述べてきたことを簡単にまとめよう。李Ｂと宋Ａの事例から、西江の刺繍技法は必ずしも母親だけから習得しているわけではないことが明らかとなった。苗族社会は夫方居住であるため、結婚後実母がいつもそばにいるわけではない。このような状況において、1人の女性は周囲にいる同時代の女性からさまざまな刺繍技法を学ぶ。つまり同時代（すなわち同じ生活圏）を生きる母以外の女性は、これまでの議論に則れば「母娘伝承」の補完的な役割を担っているのである。或いは技法という側面に焦点をあてれば、母娘の関係は逆転する可能性を有する。刺繍の習得は短期間でできるわけではなく、長期間を要する。苗族の刺繍技法の伝承を、より俯瞰的に見ると「母娘伝承」はあくまで女性を刺繍の世界に導く「入口」に過ぎず、刺繍の基礎的技法を育くむ場として捉える必要があるだろう。より多くの刺繍技法を習得することにおいて、「同時代の女性による伝承」が果たしている役割は大きく、先行研究ではほとんど報告されてこなかった事象ではあるが、これを無視することはできないと筆者は考える。

これまで論じてきたように、西江社会では、「母から娘へ」という刺繍の伝承方式のほかに、母系親族、夫方の女性親族、姉妹、女性の友人、同じ地域の女性など、同時代の女性による伝承の存在が明らかとなった。フィールド調査で聞き取りをした女性の事例を分析しまとめると、西江苗族の刺繍伝承の「同時代性」は以下のような特徴がある。

①母娘伝承は主に娘が12～13歳の頃から学びはじめ、娘が結婚後「坐家」を通して集中的に学ぶ（或いは学ばれていた）。結婚後は夫家居住となり、実母に刺繍を学ぶということはまれである。西江の現地社会では60代以上の女性が結婚後「坐家」のときに集中的に刺繍を学んでいたが、現在「坐家」をしている人はいない。即ち刺繍の習得期間は、1960年代以前は主に10代で結婚してからの「坐家」の期間、1960年代以降は10代から結婚するまでの期間であった。一方で刺繍が同時代の女性によって伝承されるという視点から見ると、刺繍の伝承時期は随意であり、結婚の前でも、結婚後でも、特に時期は決まっていない。

②同時代伝承の場所は随意である。「母娘伝承」の場合、女性は実家で母に刺繍を教えてもらっていた。しかし「同時代の女性」による伝承は、決まった場所がない。自家、友

人の家、広場など、女性が集まる場所が伝承の場となる。

③同時代の女性に学ぶのは、母から教えてもらっていない刺繍技法である。母は娘に刺繍に関する基本的な技法を教える。娘は刺繍の技術を向上させるために、母、近隣の女性、友人など同時代の女性から「空いた時間」に「適当な場所」で、一緒に刺繍することを通して時間と空間を共有し、刺繍技法を相互学習するのである。

まとめよう。母娘間の共感や教育に刺繍を位置づけるのであれば、母娘あるいは母系というものは非常に重要な意義をもつ。しかし技法を主人公にして刺繍伝承をとらえれば、技法は母系、母娘関係なく、縦横無尽に女性から女性へと世代や地域や系譜を無視して移動を繰り返しているのである。

3.3.3　刺繍教室による伝承の事例

西江は現在、観光化の進展にともない、現地の住民の生活に大きな変化がもたらされている。その中で刺繍は、観光商品として見出され、西江博物館には苗族の民族衣装が展示されている。苗族刺繍は苗族の伝統文化の代表的なものとして観光客に宣伝され、刺繍工芸は観光客の目を引くものとなっている。また近年、観光客向けの刺繍製品の販売店ができ、刺繍工紡などが開かれるようになってきており、その中で刺繍の伝承に新しい伝承方式が現れはじめている。刺繍を通して経済的な利益を求め、苗族の刺繍を広げたいという考えもあり、現地の住民は刺繍の売店、刺繍工紡、博物館などを積極的に作っている。たとえば羊排村の李Ｂ（1972年生）により、刺繍は「刺繍教室で教わる」ということも起きるようになってきている。

2017年初頭、李Ｂが経営する「西江阿幼蝋染紡績刺繍博物館」が開館した。この博物館では西江刺繍、蝋染、紡績などの作品が展示され、紡績機、蝋染の道具なども集められている。そして、館内には刺繍、蝋染、紡績などの製作過程を実際に体験できる「体験館」を設けている。同施設は観光客向けの刺繍教室のみならず現地の子ども向け施設でもあり、「できるだけ、多くの人に私たち西江の刺繍を知ってほしい」と李Ｂは語る。しかし、筆者の調査期間中であった2017年9月の時点では、李Ｂの博物館に集まるのは観光客が中心で、現地の人の姿は見られなかった。また、蝋染と刺繍の体験館では、蝋染体験のほうが刺繍より人気を呈していた。このような状況では、刺繍教室を介して現地の人へ「伝承」するという機能は空振りに終わってしまいかねない。しかし、刺繍を教える常設の場が現地社会にあるという事実は重要であり、その存在自体が西江の子供たちや女性たちに少なからず影響を与えている。

3.4　刺繍伝承が置かれている現状

現在、苗族の伝統衣装は、どうしても華美な刺繍にだけに目がいきがちだが、かつては刺繍が施された衣装の制作は、糸紡ぎ、布織とセットであった。西江羊排寨の楊Ａ（1935年生）は自分で布と糸を作っていたし、東引村の李Ｃ（1941年生）は今でも布と糸を自分で作っている。南貴村の宋Ｂ（1939年生）は現在でこそ年を取ったため刺繍はできないが、「昔、自分が刺繍に使う糸と布（衣装製作用、刺繍用）は自分で手作りしていた。忙しい時は売店で買った」と語る。かつては布を作るために、綿花を栽培したようであるが、現在では綿花を栽培している人はほとんどいない。宋Ａ（1964年生）から聞き取りした刺繍の製作過程をまとめると、1つの刺繍製品を仕上げるには、①刺繍図を描く、②布の縫い付け、③刺繍図の縫い付け、④刺繍法を決

める、⑤色合わせ、⑥刺繍の6つの作業があるという。実際、宋Ａの前の世代はその6つの部分に加えて、刺繍に使う布と糸を女性自身の手によって作りだしていたのである。

現在50代の宋Ａの世代になると、ほとんど自分で布と糸を作らなくなり、代わりに、専門店で買ってくるようになったという。その布と糸を作る技術は1950年代までは、基本的に伝承されてきたが、その世代から次の世代への刺繍の伝承は簡略化された。この背景として、1960年代～1980年代の飢饉[29]、文革大革命があり、李Aは「飢饉の時、お腹をいっぱい食べるのに精一杯だったので、女性たちは刺繍するどころではなかった」と語る。政治情勢と安価な工業製品の出現によって、布と糸の技術は伝承されなくなったといえる。

また宋Ａの次の世代（おおよそ1980年～現在）になると、刺繍サンプル[30]の出現により、刺繍の製作過程はさらに簡略化され、ただ糸を布に縫い付ける作業だけになった。表２は、李Ｃ（1941年生）、宋Ａ（1964年生）、張Ａ（1994年生）の3人が刺繍の製作過程でできることを示したものである。本来存在した刺繍の製作過程から現在の刺繍制作まで、省略された部分を表２に示した。○は刺繍の製作過程で行っていた（行う技術をもっていいた）ことを表し、×は製作過程で行わない（行う技術がない）ことを表している。

表２から、刺繍の製作が世代を追うごとに簡略化されていることは明らかである。さらに2016年現在の西江では、刺繍サンプルが販売されており、刺繍制作の過程は、これ以上ない領域にまで簡略化されている。李Ｃ（1941年生）の世代にとって刺繍とは、表2の①糸紡ぎから⑧刺繍までをセットで習得することであり、布織と糸紡ぎを含めて刺繍が伝承されていた。宋Ａ（1964年生）の世代では、既製の布、糸が簡単に入手できるようになったため、③絵図から⑧刺繍までを1セットとして習得した。さらに張Ａ（1994年生）の世代になると、刺繍の習得は単に刺繍技法という部分だけを習得すればよいことになっていった。

筆者がフィールド調査を行った2016年の時点、西江苗族の刺繍の伝承状況をまとめると以下のような状況にあった。

①60代以上の女性は前の世代から糸紡ぎ、布織、刺繍技法、紋様などの技術を継承しているが、現在既に高齢のため刺繍生産の担い手ではなくなっている。

②40代・50代の女性は、刺繍技法を習得しているが、生活を豊かにするため、食事屋やホテル業などに専念し、刺繍制作にあてる時間が非常に少なくなっている。

③20代・30代の若者は、ライフスタイルや価値観が変化したことから刺繍を継承する意欲が低下している。

以上より、西江の刺繍は伝承を担う者、継

表２　刺繍の製作過程の簡略化（筆者作成）

刺繍過程/世代	李Ｃ（1941年生）	宋Ａ（1964年生）	張Ａ（1994年生）
①糸紡ぎ	○	×	×
②布織り	○	×	×
③絵図	○	○	×
④布の縫い付け	○	○	×
⑤模様の縫い付け	○	○	×
⑥刺繍法選択	○	○	×
⑦色合わせ	○	○	○
⑧刺繍	○	○	○

承が可能な者が極端に少なくなっているという状況にある。西江苗族の女性は刺繍のやり方を母から学び、同時代の女性との交流により刺繍技法を向上させ、また次の世代の女性に伝承してきた。すなわち、母から刺繍を習得している場合には女性が刺繍の継承者であり、母として刺繍を娘に教える場合には女性が伝承者である。継承者と伝承者という２つの役割は、2016年現在60代以上の女性において併存しているが、次の世代になるとただの継承者になり、伝承者の役割は消えつつある。さらに若い世代、とりわけ20代の女性は継承意欲が高くなく、西江の女性の刺繍の継承者としての役割は消滅する可能性が高い。では、このような状況のなかで現在、刺繍および刺繍技法がどのように伝承・継承されているかを次章で示す。

４．母娘伝承を再考する

4.1　女性と刺繍技法の関係

苗族社会において、刺繍は女性の仕事であり、男性が刺繍することはほとんどない。１人の女性は刺繍の伝承と継承という2つの役割を担っている。西江出身の文化人類学者である張暁[31]は、西江で集いながら刺繍をしたり、手仕事をしながら話をする女性のグループを「小群体（中国語xiaoqunti）」と呼んだ。張暁によれば、西江の女性の「小群体」は「集まり」であり、その「場」を利用し、家族に話せないことを同じ立場である女性の友人に話したり、刺繍の交流をしたりすることを通して、家事や農作業を繰り返す日常生活を豊かにするものであるという。その「場」を西江の女性は「娯楽の場」ととらえているが、筆者はこれこそが西江の女性の日常と刺繍技法との関係が顕著に現れている場面であると見みている。女性が刺繍を通して、一緒に女性たちの「共同の時間」と「共同の空間」を作っているためである。この場、この空間にて同時代女性による刺繍技法の伝承が行われているのである。

宋Ａ（1964年生）は「暇なときに、仲のよい友達を誘い、一緒に刺繍をする。どの刺繍法にするのか、糸はどの色にするのか、友達に意見を聞くことができるし、みんなで話をしながら刺繍をした方が楽しい。時には、友達ができる刺繍技法で、私が出来ないものを教えてもらったりもする。忙しい時はみな各自、家で刺繍をする」と語る。宋Ａの話によれば、刺繍は女性が集まるに値する十分な「理由」となる。刺繍により作られた共同の時間、空間があるからこそ、西江の女性の「小群体」は形成されるのである。このように「小群体」は形成され、さらに刺繍の技術、デザインなどの交流が行われることによって、刺繍の技術・技巧に磨きがかかり、そこが刺繍の伝承・継承の「場」となる。すなわち、技法の伝承・継承の多くは、決して家庭内というドメスティックな領域に留められているのではなく、「小群体」のような時間的・空間的にオープンな状況においてなされているのである。言い換えれば、特別な技法を家庭内という領域に留めてしまえば、継承者不在ということでそれが廃れてしまうこともあるだろう。技法はあくまで「小群体」というオープンな場によって、伝承･継承されるのである。

4.2　母娘伝承と同時代伝承

中国国内外では苗族の刺繍の伝承について、女性を刺繍の伝承者、そして継承者という観点から、「母から娘へ」という「母娘伝承」に偏重した研究が少なくなかった。たとえば先述した龍葉先は「苗族の刺繍工芸の伝承は『伝承者』と『継承者』の相合作用の過程である」[32]と指摘している。また佐藤若菜[33]も衣

装をとおして作られる「母」と「娘」の「母娘関係」を強調している。苗族の刺繍工芸に関する説明は、一人の女性が刺繍を伝承、継承するという2つの役割を果たしていることを周知の事実として語られてきた。だが、本論ではこれまでみてきたように、刺繍技法という観点からみれば、その伝承と継承は母娘あるいは母系だけでは説明できないということが示された。ここではさらにその点を細かくみていきたい。

以下では、楊A（1931年生）と娘の李B（1972年生）の事例と、宋A（1964年生）の事例を通して、彼女らの人生を娘→結婚→母という3つの段階に分けて、各段階において彼女らが果たしている役割と刺繍の伝承および継承の様子を提示する。

まず楊A（1931年生）と娘の李B（1972年生）の事例である。李Bは娘という立場の間に、母の楊Aから刺繍を学んだが、さらに刺繍に興味を持ったため、自分で刺繍（包繍）しているものをほどいて習得したり、友人と一緒に刺繍する時に知らない刺繍技法（貼花繍）を教えてもらったりしていた。また、李Bは3人の姉からも教えてもらうことがあったという。李Bは結婚後もずっと刺繍を続け、母親となり息子1人と娘１人を持った。娘が刺繍に興味を示さなかったため、娘には教えていないという。李Bは娘に刺繍を教えてはいないが、「西江阿幼蝋染紡績刺繍博物館」、「雷山県西江阿幼苗族刺繍紡」、「也東刺繍作紡」を経営するなかで、現地の子どもたちや、観光客に刺繍を教えている。楊Aと李Bの刺繍の伝承、継承の様子は図４の通りである。

次に東引出身で羊排寨へ嫁いだ宋A（1964年）の事例をみてみよう。宋Aは彼女の姉妹と年齢差はあったが、姉妹4人で母から一緒に刺繍を習ったという。母の代わりに姉から習ったこともあった。宋Aは2016年の刺繍大会の試合に参加するため、双針繍を友達から教えてもらったりもしており、自分の知らない技法を現在でも学び続けている。調査当時（2016年2月）、宋Aは自分が経営している食堂「古屋人家」でアルバイトしている張A（1994年生、女性、郎徳上寨[34]出身）に平繍を教えていた。既に述べたように、平繍は刺繍の入門、基本技法である。筆者が調査した西江の女性は皆、母から一番最初に習ったのは平繍だと語る。換言すれば、平繍の伝承方式が基本的に「母娘伝承」の代名詞であると考えられる。しかし宋Aと張Aの2人は血縁関係でもなく、親戚関係でもない。それにも関わらず、張Aは本来母から学ぶはずの入門技

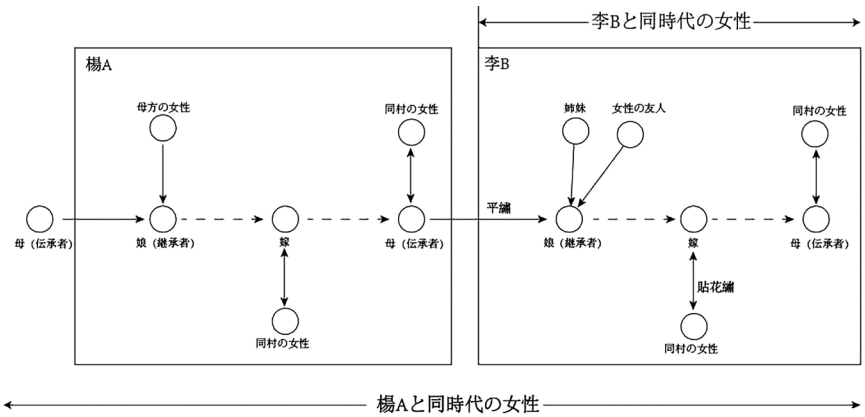

図４　楊Aの同時代伝承図（筆者作成）

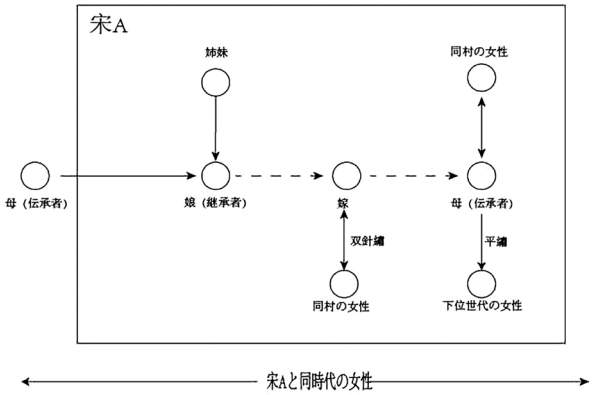

図５　宋Ａの同時代伝承図（筆者作成）

法でさえ宋Ａから習っていた。張Ａが宋Ａから平繡を習ったということは出身地以外の地域の女性でも、一緒に生活する時間と空間、張暁の言葉を借りれば「小群体」があれば、刺繍の伝習が可能であるということである。

紙幅の関係上多くの事例を示すことはできないが、楊Ａと宋Ａの事例から、刺繍は母から習得するというのが苗族の基本的な伝承形態であることが示されたが、同時に母のほかに、同じ母系に属する親族、姉妹、女性の友人、同じ地域に居住する女性などからも相互的に学習することが明示された。たとえば東引寨の李Ｃ（1941年生）と李Ｄ（1968年生）は姑と嫁の関係にあたる。しかし2人は現在共に居住しているため、互いに刺繍を教え合うことがある。実母から基本的な刺繍の入門技法を習い、刺繍への道へ導かれた後で、母親以外の女性から教わることも少なくない。

繰り返しになるが、これまでの先行研究では母娘伝承に注目するあまり、母娘間の坐家を通しての伝承ばかりが注目されてきた。苗族女性における刺繍伝承はむしろ、1人の女性のライフステージが変化するに及んで、その女性が刺繍伝承および刺繍継承において果たしている役割が変わるのである。年を重ねるにつれて、結婚、夫方居住などの生活環境の変化もあり、母から離れ、母に刺繍を学ぶ機会、時間が減少するのに対して、同村に住む同時代の女性と一緒に刺繍する機会と期間が増える。むしろ技法の習得に関しては、夫方へ居住してからの方がより充実したものとなる可能性が高いのである。

図４と図５において、具体的に誰からどの刺繍技法を習得したかという細かな部分、また父方からの刺繍習得があるかということに関しては、十分なデータのサンプル数がある訳ではなく、またデータの確度が高いとはいいがたい。だが苗族の女性は結婚後夫方居住となり、刺繍技法の伝承、継承に禁忌がないことから、母娘は父方の親族の女性から刺繍を習う可能性が大いにあると言える。宋Ａと李Ｂが刺繍技法の中の一番簡単な平繡を母から習ったことは確実であり、龍と佐藤が指摘する「母娘伝承」は確かであろう。しかし、宋Ａと張Ａの事例からも窺えるように、技法という観点を越えて、刺繍そのものを伝承するという場面においても（母親ではなく）同時代の女性がその役を担う場合がある。

1人の苗族女性の人生を3つの段階に分けると、図4の楊Ａと李Ｂの事例、図5の宋Ａの事例などから、刺繍の伝承において母が活躍するのは娘の人生の3つの内、娘が結婚する前

の段階であることがうかがえる。1人の女性の人生を1つの時代と考えると、この女性が生まれてから死ぬまでの間、刺繍習得には母から、他の女性から多かれ少なかれ影響をうけている。刺繍の習得そのものは長期にわたり、少しずつ積み重ねていく長い過程である。特に様々な刺繍技法に目を向ければ母を介さない伝承、継承の方が多いかもしれない。ここで筆者が主張したいことは、母から教えられるのはあくまでもその長い過程の一部分にすぎないということである。「母娘伝承」というのは西江苗族の刺繍伝承の主たるラインであるが、刺繍技法という観点から母親の役割を俯瞰すれば、母もその同時代の女性の中の1人に過ぎないということである。

刺繍を刺繍技法という観点から改めて捉えなおせば、母から刺繍を教えられるのは、娘を刺繍の世界に導く段階の時点であり、またそれはかつては糸紡、布織とセットであったのだった。また刺繍技法の伝承は、母としては娘に刺繍を習得させ、恥ずかしくないようにという、苗族女性としてのたしなみを身につけさせ、将来良い嫁になれるようというような情動的な目的が多分に含意されている。これに対して、同時代の女性による伝承は、一緒に刺繍する空間と時間を共有するという、より伝承と継承に特化した状況に置かれており、母娘伝承のような「娘が良い女性になって欲しい」という情動的な目的を達成するためということではなく、純粋に刺繍を伝承する意義を含んでいる。改めて言うまでもないが、刺繍技法の伝承・継承はその媒介として必ずしも母親を必要とはしていないのである。

5．おわりに

本論では先行研究およびフィールド調査を通して、西江苗族刺繍の種類を概略し、「伝承」のあり方を、①刺繍紋様を伝承すること、②刺繍の技法を伝承することに分けて考察した。とりわけ②刺繍の技法を伝承することに焦点をあてて議論を展開してきたが、刺繍技法に関しては、親族関係、婚姻状況をとおして確かに「母娘伝承」はみられるが、より複雑な技法は「同時代の女性による伝承」に負う部分が多いことが明らかとなった。

本論のデータは2016年の2月、7月、9月の3回、40日間にわたって刺繍に関するフィールド調査を行ったものに基づく。本論で示したように、フィールド調査のデータをもとに西江の女性に聞き取りを行い、3人の親族関係図の分析を通して、西江の刺繍技法の「母娘伝承」の実体を明らかにした。また、刺繍技法の伝承・継承において「母娘伝承」のほかに「同時代の女性による伝承」の重要性を指摘した。これは刺繍の技術・技法という点において特に重要である。聞取り調査で得られたデータは20世紀後半以降のものであり、苗族の「悠久の歴史」という観点からみれば、坐家が廃れていったこの時代は、政治経済的に特異な状況に置かれていたと言えるかもしれない。しかし、坐家が主流であった時代においても、技法の伝承・継承という視点からみれば、本論で議論した観点は有用であったということが出来よう。なぜなら、刺繍技法の伝承・継承が「小群体」においてなされるとすれば、たとえ坐家が残っていたとしても、（嫁ぎ先の集落にて行われるという意味で）意義ある議論であるためである。

西江苗族の刺繍はこれまで「母娘伝承」と「同時代の女性による伝承」という2つの伝承方式により受け継がれてきたが、観光化が進むなかで、刺繍工紡、刺繍博物館などが現れ、刺繍の伝承において「刺繍教室」という新たな伝承方式も現れている。刺繍教室による伝

承は近年出現したばかりなので、ここで多く論じることは避けたいが、今後男性の継承者、苗族以外の女性の継承者の可能性も排除できない。ただ、ひとつ言えるのは苗族社会の刺繍を取り巻く状況は常に変化し続けているということである。

本論でも再三述べたように、筆者は苗族の刺繍伝承における「母娘伝承」を否定するつもりはまったくない。むしろ本論では複数の事例を通して「母娘伝承」を積極的に認めている。だが、これまでの先行研究ではそれが強く主張されるがために、「小群体」で行われるような同時代女性における伝承・継承の様子が見落とされてきた。刺繍技法の伝承・継承という意味において同時代女性の存在は、母親と同等あるいはそれ以上に重要である。というのも刺繍技法の習得という面において、母娘が共有される時間は限られているためであり、婚出後における同時代女性間でなされる交流の方が技法の習得という意味ではより重要であるからである。本論で提示したデータは地理的、時代的な条件もある程度限られた範囲での議論となってしまったが、これまでの研究で見落とされてきたこの点が指摘できたとすれば、本論の目的は達成されたと考える。

注

[1] 蒙甘露、「苗族刺繍芸術的意蘊」、『中央民族大学学報』1995年第6期、p.40

[2] 悠久の歴史：西江羊排寨にある歴史を刻んだ石碑によると、「秦漢から唐の末期に至って、封建王朝は相次いで『五溪蛮』にある苗族のところに進兵し、『五溪蛮』にある苗族は逃げるためまた『五溪』の奥へ遷移した。遷移は2つの路線に分け、1つは舞陽江を沿い、思州（現在の岑巩県）に至った。もう1つは沅溪（現在の清水江）に沿って西へ向かい、黔東南の部分地域および雷公山のあたりに辿った。南下し広西北部に至った1部の苗族は都柳江を沿って北上し、1部は榕江、従江、丹寨に定居し、1部は雷公山のあたりに定住した」。

[3] 苗族人口：『中国2010年人口普査資料』（中国統計出版社2010年）により、全国の苗族人口数は9,426,007人である。『貴州省2010年人口普査資料』（中国統計出版社、2010年）により、黔東南地域の苗族人口数は1,447,257人である。

[4] 鈴木正崇・金丸良子、『西南中国の少数民族』、古今書院、1985年、pp.23～25

[5] 鳥居龍蔵、『鳥居龍蔵全集（第11巻）』、朝日新聞社、1976年、p.25

[6] 1951年5月15日、国務院（当時は「政務院」という）が『政務院関予処理帯有魏岐視或侮辱少数民族性質的称謂、地名、碑碣、匾聯的指示』を公布した。

[7] 中国行政区劃ホームページwww.xzqh.org/html/list/297.html参照、2017年12月28日取得

[8] 『貴州省地図』、2006年、中国地図出版社、p.45

[9] https://baike.baidu.com/item/%E8%A5%BF%E6%B1%9F%E9%95%87/7922847?fr=aladdin参照、2018年1月2日取得

[10] 改土帰流：元代から清朝初期にかけての王朝中央政府による地方の原住民に対する間接統治システムであった「土司制度」を次第に廃止し、王朝中央政府直轄の州県制に転換させ、科挙に合格して選抜された「流官」を派遣し直接支配するという、明代以降の一連の制度転換をいう

[11] 同化：清朝時代、雍正期における特に1726年から1731年までの間、反乱を起こしたり、法を犯したり、後継者が欠如したり、土地を返上したりする「土司・土官」は、次々に廃止された。乾隆期になり、貴州省の「改土帰流」（注9）が達成されてから、中国人（漢民族）による移民を通じて、「化苗為漢（苗族を漢民族に変えること）」も計画された。苗族に対して漢民族の姓を強要し、漢人戸籍として登録させた。

[12] 鈴木正崇・金丸良子、『西南中国の少数民族』、古今書院、1985年、pp.86～87

[13] 龍葉先、「論苗族刺繍伝承的文化意義」、『貴州学院院報』（社会科学版）2008年第1期、pp.101～104

[14] 龍葉先、「論苗族刺繍伝承的文化意義」、『貴州学院院報』（社会科学版）2008年第1期、p.102

[15] 佐藤若菜、「衣装がつなぐ母娘の『共感的』関係」、『文化人類学』2014年、pp.305～327

[16] ミャオ族：中国では苗族と呼んでいるが、日本の学者は苗族をミャオ族と呼んでいることもあ

る。

[17] 黄玉氷、「西江苗族刺繍的技法研究」、『絲綢』、2011年第48期、pp.43～49

[18] 呉平、「貴州苗族刺繍の文化内涵及文化初探」、『貴州民族学院学报』（哲学社会科学版）2006年、pp.118～124

[19] 劉孝蓉、「貴州民族工芸品伝承と旅行商品開発探討――以台江県施洞鎮銀飾、刺繍為例」、『貴州師範大学学報』（自然科学版）、2008年

[20] 苗繍：苗族の刺繍の略称である。

[21] 呉平、「貴州苗族刺繍文化内涵及技芸初探」、『貴州民族学院学報』（哲学社会版）2006年、p.122

[22] 開覚：西江鎮の属する行政村の１つである。

[23] 胡蝶ママ：苗族は蝶を「胡蝶ママ（苗語音訳 gam bang hyu mei pei）」と呼んでいる。胡蝶ママが苗族の始祖と考えられ、苗族の人が蝶を自民族の「守護神」と考えている。

[24] 也薅：地名。中国貴州省黔東南苗族侗族自治州丹寨県に属する。

[25] 寨：周囲を木の柵や塀で囲っている村。規模の小さい城。

[26] 凱里市：地名。中国貴州省黔東南苗族侗族自治州に属する。

[27] 遼寧省：地名。中国の東北に位置する。

[28] 刺繍試合:「雷山県民族手工産業発展办公室文件」『雷手工办通（2015）1号』により、銀細工と刺繍の伝統手工芸を発展させるため、雷山県政府により手工芸類に属する銀細工と刺繍の試合が組織された。刺繍試合で優勝した人に「十佳繍娘」という名誉を与え、賞金を与える。

[29] 飢饉：1958年～1963年、全国範囲で大きな飢饉があった。

[30] 刺繍サンプル：デザイン済みの刺繍、糸を縫い付ける作業だけを残している。

[31] 張暁、『西江苗族婦女口述史研究』、貴州人民出版社、1997年、p.105

[32] 龍葉先、「苗族刺繍工芸伝承的教育人類学研究」、中央民族大学、2005年、p.25

[33] 佐藤若菜、「衣装がつなぐ母娘の「共感的」関係」、『文化人類学』2014年、p.305

[34] 郎徳上寨：中国貴州省黔東南苗族侗族自治州雷山県郎徳鎮に位置する苗族の村。